**第26課 プリムの祭り 2018.7.1**

◎ 賛美(一同) : 韓日194番(聖歌465番)、韓日340番(聖歌496番)

◎ 信仰告白(一同) : 使徒信条

◎ 御言葉朗読(一同) : エステル 9章20∼22節

◎ 本文朗読　◎ 主の祈り(一同) : 一番最後に

◎ 今日のマナ

プリムの祭りは、くじを意味するヘブル語‘プル’から名前が由来する、イスラエルの民族の祭りです。バビロン捕虜時代、アマレクの子孫ハマンがユダヤ人たちを憎み、プルすなわちくじを引いてユダヤ人達を全滅させる日付を定めましたが(アダルの月の13日)、むしろこの日にユダヤ人たちは救いを受け、大きな祝福を受けハマンと彼の一族が死ぬようになりました。プリムの祭りはこの時の救いと勝利を記念する日として、今日に至るまでユダヤ人たちから多く愛されている日です。今課では、プリムの祭りが持つ意味について分かち合います。

**1.先祖たちの信仰をたたえる**

プリムの祭りが持つ一番目の意味は‘先祖たちの信仰をたたえること’です。紀元前586年南ユダの滅亡以降、バビロン捕虜期を過ごしながら、イスラエルの民族は絶体絶命の危機を迎えました。滅亡した国家、破壊されたエルサレム聖殿、ばらばらに散らばった民たち、イスラエルには一抹の希望も残っていないように見えました。しかし何よりも彼らに大きな脅威となったのは、まさに ‘信仰の喪失’の危機でした。国家の敗亡よりも、これを防いで下さらなかった神様に対する不信と背教の誘惑こそがイスラエルの根を揺らがす根本的な脅威でした。

しかし、イスラエルの民はとても独特な人々でした。彼らはバビロン捕虜として連れて行かれて後、神様に対する信仰を、失うことなくむしろもっと強固にしました。信仰を持つことの出来ない環境で、信仰を持ちました。彼らは国家の滅亡が、神様の無関心や無能のゆえによるものだとは考えずに、自分たちの不従順による神様の叱責であるという事実を悟り、謙虚に受け入れました。絶望の前で、神様から離れず、自分自身を振り返ったのです。このような彼らの態度は、先にエレミヤやエゼキエルのような預言者たちが、審判は一時的であり、民は神様の恵みによって再び故郷へと帰るようになると預言したことによるものでした(エレミヤ32:15、エゼキエル 37:25∼28)。

プリムの祭りは、このような亡国の痛みを経験し、捕虜の生活をしている中でも、むしろ神様に対する信仰を堅く守った先祖たちの信仰を称賛する祭りです。その先祖たちの中には、プリムの祭りが生まれることに決定的に貢献したエステルとモルデカイ、そして共に断食をしつつ祈ったユダの民たち、より進み出てダニエルと三人の友達、エズラ、ネヘミヤのような人たちがいます。

私たちもまた、過去のイスラエルの民のように失敗と苦難の時期を送っているかも知りません。そしてそれよりももっと大きな脅威である信仰の危機を迎えているかも知りません。もしもそうだとしたら、バビロンの地で過ぎし日の過ちを振り返り、神様の回復を願い求めたイスラエルの先祖たちを覚えましょう。

人生の中に危機はいつでもあり得ます。しかし、危機それ自体よりもより大きな脅威は、その危機の後に神様から遠ざかる事であり、危機よりもより重大な事は、危機の前での私たちの態度です。危機の時に、自分を振り返り、その中にある神様の御心を知り、それを信仰の成熟の機会として下さい。信じることの出来ない状況で信じることが真の信仰です。苦難の中で信仰を守る時、必ず神様は私たちを再び回復して下さり、大きな価値のある実をもって報いてくださいます。

**2. 限界がない神様の救い**

プリムの祭りが持つ二番目の意味は、‘限界がない神様の救い’です。遠く遠い異国の地バビロンで暮らしていたユダの民たちは、信仰を回復し、良く守っていただけでなく、その場所で神様の救いを体験しました。

彼らの体験した救いは、不可能な状況の中で受けた救いであるから、より特別なものです。当時ペルシヤでハマンはアハシュエロス王の寵愛を受ける家来としてその威勢は相当なものでした(エステル3:1∼2)。その上、彼は願うことがあれば王を言いくるめて達成してしまうような、とても悪賢い者でした。結局ハマンの悪巧みによってアハシュエロス王は、プリムの祭りの日であるアダルの月13日に、ユダヤ人たちを殺戮し、彼らの財産をかすめ奪うようにとの文書に印を押して、ペルシヤ中に公示されるようになりました(エステル3:12∼15)。

王の印が押された文書が公示された以上、ユダヤ人たちはアダルの月の13日に間違いなく殺戮されるという危機に置かれるようになりました。しかし、いくらハマンが狡猾な計略によってユダヤ人を迫害しようとも、彼らには神様がおられたゆえに、安全だったのです。

ユダの民の断食の祈りを聞かれた神様は、まさに奇跡のような方法をもって順番に働かれ、ユダの民を救われました。エステルが命をかけてアハシュエロス王に進み出た時、王が彼女を迎え入れ、彼女の願いを聞くようにされ(エステル5:3)、また王が偶然にモルデカイの業績を聞くようにして彼を高くするようにされ(エステル6:6∼10)、結局はハマンが王の信任を完全に失い、死刑を受けるようにされました(エステル7:2∼10)。神様の御手によって問題の塀は落ちてしまったのです。

その結果、ユダヤ人たちが殺される事になっていたアダルの月13日は、むしろユダヤ人たちがペルシヤの全地域で高められる日となりました(エステル8:9∼17)。そしてこの日を記念して、全てのユダヤ人たちは毎年アダルの月14日と15日をプリムの祭りとして定めて守るようになりました(エステル9:21)。プリムの祭りは、神様の御手が届かないように思われた異邦の地で、寂しく過ごしていたユダヤ人たちが、神様の救いを経験した出来事をたたえる日として、イスラエルでは今日まで、この日を守っています。プリムの祭りの奇跡の働きは、神様は限界を超えてご自身の民を救われるという事実を悟らせてくれます。私たちが、神様に信頼し祈る時、神様は異邦の地ペルシヤでイスラエルの民を救われたように、私たちもまた救って下さいます。人生の谷を過ぎる度に、プリムの祭り、神様の救いを覚えて、神様を信じ、頼りましょう。神様の救いは限界がなく、神様の御手が届かない場所はありません。

最後に、プリムの祭りは分かち合いの祭りであるという事実を覚えなくてはいけません。ユダの民は、プリムの祭りに貧しい人たちを救済し、神様が下さった救いを喜びました(エステル9:22)。私たちも分かち合いの祭りであるプリムの祭りを覚え、貧しい隣人を仕えることで、救いの喜びを表現しなくてはいけません。

◎ マナの要約

<先祖たちの信仰をたたえる>

1.バビロンに捕虜として連れて行かれたイスラエルの民は大きな信仰の危機にあいました。

2.しかしイスラエルの民は、信仰の危機の中でもむしろ信仰を堅く守りました。

3.人生の危機にあうとき、自分を振り返り信仰をより堅くしましょう。

<限界がない神様の救い>

1.ペルシヤでユダの民たちはハマンの脅威によって皆殺しにされる危機に置かれました。

2.しかしユダの民の祈りを聞かれた神様が奇跡を行われ、彼らを救って下さいました。

3.限界がない救いを下さる神様をいつも信頼し祈りましょう。

4.貧しい隣人に仕えることで救いの喜びを表現しましょう。

◎ 日々の中のマナ

<隣の人と挨拶>

1. 大変な時にもっと良く信じましょう。　2. 神様の救いは限界がありません。

3. 分かち合うことで救いの喜びを表現しましょう。

<祈り>

1. 人生の危機にあうとき、私の心を振り返り、信仰をより堅固にするようにして下さいと祈りましょう。

2. 人生の危機にあうとき、神様の救いには限界が無いことを覚え、祈るようにして下さいと祈りましょう。

3. 神様に救われた者として貧しい隣人に仕えることで救いの喜びを表現するようにして下さいと祈りましょう。<とりなしの祈り>隣の人と祈りの課題を分かち合い、共に祈りましょう。